



欽定四庫全書



詩林良歌集目録

今私書之

第五 有由緒哥 下卷又十八ヶ条

一浦添大匠事

二松浦佐用作

三松浦河釣鮎

四様児事

五様児事

六菟名貞處女の息擲

七おての下着事

八おての下着事

九菟名貞賜楯

十奥列金花出事 十一炭火の信松事 十二信松の夜事

十三菟名貞冬路

十四おての神事

十五おてのぬれ

十六おてのぬれ

十七おての神事

十八おての神事

十九おての神事

廿おての神事

廿一おての神事 廿二おての神事

廿三おての神事 廿四おての神事

廿五おての神事 廿六おての神事

廿七おての神事

廿八おての神事

廿九おての神事

サクラコ
櫻女児事

春はれがうふせんゝ思ふに 梅はれおはるゝ家なり おひ 梅あり
 いふかみよきなる梅はれさへはひひやあ人のやうな女は同
 衣ひし梅子といふ女わたり二人仕立ふ思ふかゝるに
 言ふに男命とてそわそひふれし女さひきりて
 昔より一女れありて二門の幼きとてさす梅の
 心を又やうにさうさうさうさうさうさうさうさう
 心く梅の仲へさへさへさへさへさへさへさへさへ
 おふひひぬ二人乃男思はれぬとさすせもさへ
 形とてさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

カッラコ
繡見事

万六
見那池——先王親のまじりされ水ひう一男
わいふとて女を娶とあはせけむらあやし二男
是家乃山とのいふおれとゆき乃とていふふ人三男
右大和女よ三人のとてわりて一人乃女と思つる
女の名とていふとていふ人のいふとていふ女なりとて
一女乃乃法やとていふ病のいふとて雄れんといふ
ふといふ事なれといふていふていふふみ
那乃池よりて方とていふとていふとて時三男

明弘治五年丁未

六

菟^ウ名^ナ貞^ヒ處^{フトメ}女^メ與^{オキ}擲^{ツキ}事
付^ツ直^チ川^{カハ}の^ノ多^タと^ト射^セる

九

ヒツキト日本記ニヨム

第一乃女之乃妻と云ふは女のおとこ
 田舎

田舎
豫慶

萬の国のひしきおとどくよふにれ海のうさう

卷之四

はるかにあまの枝をひらきつゝとらぬとこありと云ふ

今

石三首 好く書きしなり 文政十一年の國

193

大石屋よりひきとめと云ふをそれと二人仕立

人

三
二
一
要
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

2

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

西

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

5

[illegible]

...

[illegible]

乃

[illegible]

女

とすといふては、
 けいとうの
 名をうけ
 たり

多

奥擲と云ふは擲子入なり

三

とや万葉中九事とて又古方わらうとてあふ

新

は乃ては黄楊乃少くとも一ふん生はえ

詩

ありけりと思ふに
寝磨のあはれ
今

分

本入
新
し
い
が
も
う
ん
な
あ
い
や
ん
の

入

乃下事

[illegible][illegible]

とれし書一冊此使と共國へ送りし時藤
より取らるるをとりて久礼波久礼波
此二人のしるし紙にうてある事因り
申也なりく見れば新記よりなり

葛城王賜姓事

横江実子今れ東へ校めおし海で死す
右聖武天皇天平八はみき十月并はた
緒兄云々く人毎ふくく此の事なり
ゆりし時此のわらう橋とありていふ
ら確ふたされうらうらと我れなり

この書のゆかり集よりなり

奥列金親山事

とれし書一冊此使と共國へ送りし時藤
より取らるるをとりて久礼波久礼波
此二人のしるし紙にうてある事因り
申也なりく見れば新記よりなり

石有田皇子の孝懐天皇の御子也母の女事なり

神を祀るに
 今も
 神を祀るに
 今も

わといふ神小ふまゝなり

下下穩園河敷流文しり社社ては社社人のらひよて小

果てそいつ事あるは之也

悔
求
利
可

今所お望みは、
 一、毎日のわきまを、
 二、秋の山歩き、
 三、後に

後

はるのぬれを

ふれそふにげと書かす我々をくらけぬは
 石川 也

物以類聚

固陋之方

是より我はるるをいふにすかたなるおとめなり
 ちりほの田まゝくそ女男とてわりと石門乃
 女郎といふ女あれと思ひつゝさうなると東隣
 の貧女もひとりとてこれの中におかきと云う
 まゝ田まゝあれともして大井と成て
 ひろくがゆれしわら河いふ女はいふと
 うそけういふ田まゝとてあゝおかしな事
 をせられと風流にもおもはれたがう田ま
 とにていふにその海をもめて歎也瀬戸之也

山歎し一夫のあつるをくそ後よりひかり
地をれんを田まうくそ今もあつるや

世のいふあつるのいふははれのかのいふははれ

十六

まうひあれ^{カウ}中^{ウニ}部^{ウニ}云々

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

十七

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

うひものひあつるや^カひあつるや^カひあつるや

此書より仰る所の税よりいふにあらんや
 わるごとく悲乃きは可なりとせむその使わ
 る所よりいふに税は是より税のせよとわれ
 此税のせよとわらるるいふとせむ今よりい
 とはなりなりとわらるるいふとせむなりと
 我よりいふ使わるる所よりいふに税は税
 報の件なりと通作なりとせむなりと
 なるかむなりとせむなりとせむなりと
 右取税より我税よりいふに税は税なりと
 いふ我より税は税なりとせむなりと

ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと

白紙よりいふに税は税なりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと

ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと

ありとせむなりとせむなりとせむなりと
 ありとせむなりとせむなりとせむなりと

一

康大

同六

2

4

[illegible]

勅勅

十九

子正記

煙炎者可爲一丈胡殿之山系の松燈乃間隙
 とひげり胡殿の山脈は廻る不長おろそ後の
 あふむおけり老た故来風流やもい事なく
 注ゆり又歌詠法師ハ秘教とて所より統と司ぬ
 日後成之衆おハ是を用ゆる事
 梨もともかひ聲の煙とく今わきあがり小山園が意気
 ちもれぬ火のふらぬまじり
 山鳥乃色れ鏡の事
 山鳥のうらみ川に水おかしかなんとも人こゝろを地あきらめ
 心山鳥のうらみ川に水おかしかなんとも人こゝろを地あきらめ

わさふもくはるのちとあはれなる
いふつらふもやいふもあはれなる
もとあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

はるのちとあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなる

二十 鳩の秋

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる
あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

ふれの方ほど布はさういひのひんは
ちのほそ布も奥列もあつて布也とい
授けられさういひさういひさういひ
しつて布もいひさういひ布もいひ
部の布もいひさういひ奥列もいひ
ふれさういひのひんはさういひ布の
いひさういひのひんはさういひ布の
ていひのひんはさういひ奥列もいひ
布もいひさういひのひんはさういひ
ぬれさういひ布もいひさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

卯辰のいひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

いひさういひのひんはさういひ布の

三つ故よむとらとていふ毎ら日統とらん也
 然も同漢とれともいふとれとらとらとら
 川也とれとらとらとらとらとらとらとら
 とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

及衣見一衣事

万十一
 同
 同
 同

志心と云ふは、
心造る事也。心
造る事とは、心
を造る事也。心
を造る事とは、
心を造る事也。

と云事ありといひ得る事也此入るるを

同事也

七

河社

力二 じあ月すえそい本

神のまゝに、おちた跡のほゞ、こゝろをぬかひ

お来し之とてく神の心も心事ふ

て川結もふたわろ海ふそそふなるうり費ふ

集米荏院此詩時因親王涉屏風於其下

二五三 約り

祢也云事とより安ん調也

東坡集

如社方より久しきおはせりやういふ

石河原より大坂成以鏡子川乃豊甘小坂

後澤池より采女事

[illegible]

ふそ、猿渡乃池、あまのびくを、山にわく
も、あうーめ、ういひ、な事を、次の次は、大衆
たれ、ういひ、うて、や、さう、わと、ねら、おひて
池の、ゆゑ、ふち、ゆき、うて、かて、へ、
あ、よ、せ、新、き、り、時、人、兄、あ、り、あ、ら、ふ、お、つ、あ
う、い、ん、は、し、う、く、よ、ま、せ、あ、つ、あ

[illegible]

からさのつひのるす

一説に、これにのみ
の事

ちきわいなる男とありきわらうるあなれす
いねいふくよれ敷いふくうられんのあなれ
ふあとりきききききききききききききき
わくわくきききききききききききききき

わくわくきききききききききききききき
ちきわいなる男とありきわらうるあなれす
いねいふくよれ敷いふくうられんのあなれ
ふあとりきききききききききききききき
わくわくきききききききききききききき

係り多志

四

わくわくきききききききききききききき

三

わくわくきききききききききききききき

わくわくきききききききききききききき
ちきわいなる男とありきわらうるあなれす
いねいふくよれ敷いふくうられんのあなれ
ふあとりきききききききききききききき
わくわくきききききききききききききき

うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり
いふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり
うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり

海首

無四

うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり

後人

無四

うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり

うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり

無四

無四

無四

うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり

海首

うらふとくといふなり人懐と云ふれんか八つれんり

今も思ひてあそびのうたをうたふ
お世にうたふてゐるうたをうたふ
歌うたあふ二葉開白れと事とてうたふ
今一ふたのおうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
を今一ふたのうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた

八海事

いそぐ思ふわらふとてあそびのうたをうたふ
お世にうたふてゐるうたをうたふ
歌うたあふ二葉開白れと事とてうたふ
今一ふたのおうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
を今一ふたのうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた
うたふてゐるうたをうたふてゐるうた

未松山事 付未松

其

同

同

其後とてわづらひしに東の松山にあらん

右昔男女わづらひしに東の松山にあらん

海のふちをわづらひしに東の松山にあらん

しとてわづらひしに東の松山にあらん

あつたふちをわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

松山のふちをわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

乃松山の松とて三重の松とて

とてわづらひしに東の松山にあらん

松山のふちをわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

とてわづらひしに東の松山にあらん

又隆源河名集とて如く恒長乃人の神なり
の橋より神は通るなりと故にけふハ恒長河
神乃河名と云ふ

子之為婦也
言其風也
言其聲也
言其容也
言其德也

在り奇は全集の一なりと云ふは橋本くわする
 事なり又橋本の物語といふおもしろいといふは
 事なりと云ふは全集の一なりと云ふは橋本くわする
 事なり

武溪仁亭

我乃也
武隈
乃也

右奥列じく海より取よ二本乃松わらふ
しして中より一より如くハ山風
あつたのわをいふなり

[illegible]

右詞之則光祐トのふみられざるを
くぬのむをうむひつとく

武隈松平とて此の心をもく練ぬまわぬ人
僧正
藤光

右詞云
 春風吹綠柳
 燕子剪輕盈
 落花流水
 春已歸
 惜春人
 空自傷
 春風吹綠柳
 燕子剪輕盈
 落花流水
 春已歸
 惜春人
 空自傷

右詞云云乃山姥の歌なりけり

てはうり

下秋

春造
 列樹

春造列樹

右詞云々此山歌也くもあつてもあつても山歌えいお
白河の流のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
笑つても道也くもあつても山歌えいお
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

檀

名とふくも芳かふれいふね内面杖ハ良きところ順

右詞之類又片匠家の屬風よき所なり

けふさうくあつた中にも紅葉うつくわつた

四川

何止

八

此後之世也

讀金如

古今集離別歌也如道之ぬとふる歌なり

此之朱歷一少一多一

世々の方ハ祝云人の後ヨリ云々云々

廿二日
 壬子年
 正月
 廿二日

子也子也子也子也子也子也

後
去々相噴ふ事お進さるゝ事すけね親もさうの
要之

五

大勢にうきをよめしむるは

ふふふふふふふふふ

ねまふと人おはるはあはれなる家より成る
 ねまふと人おはるはあはれなる家より成る
 式

あまのふとねとていふこと

聖中乃信乃事

此の字
 人の世の中をわたりて
 心と云ふこと
 人々

右聖中乃清乃懷乃寧乃安乃

今更にわたりて
 今更にわたりて

とまはるる地はれどぬくのまじり也 能因

文政六年申元月一日の書といふ

つゝあひてわさるやぬんずもかきしうに海に
 渡る

奧義集。同撰。乃云。

右方男所とくふくじとて女は疾也

所への中は信ありふく汲地へ汲るるを

五十四

万五箇会大役者来は河互あ
 付乃舟もやうらゝく
 今付日也
 所も志て
 江戸へ
 参る
 有威之節

右邊唐使より大使副使判官主典の四人

ひわふくそく空想船とてふらるゝ也同附のち

新中書省

四六

藤田氏校章

いはいさうあつた。毎のくもは、乃ちねえが、わとてへ
おまろくの柱は、楠木の一ざうひらふて、か
おし、続ろうといつたねえ、もうそ藤田社におま
やうなものと換ふ也

四七

小形中の扱いと事

乃て此の如く。いふ所を今うふすを想はねん
右思ふに、單に名をいふといふ事と云ふる今

[illegible]

不乃事乃生乃死乃今

四八

溪松校子回象率

可

白浪江海移之乃家妻試之乃成金也

大寺何事とて高き人松とて人

又時志々々々花紅葉々々々々々々々々

五

八幡宮の松の枝とみじとふ

四九

余を海城女乃るわる事

ふとぬきふくみんたのわいぬをいつしや
好忠 そい 曾孫

好忠

右掌丹二百六十首、中、右、上、旬のありと

海に感ふのさうそめありとて文を松ふり

五十

て丸心曲字ヲハナトミ

一、

蛭とふふのうをかきやせうくひて

わろこのゆふちよりさそふ東のつゝぬきそ
 秋をばうゝふし日中ぬくあらしをそ
 かふきんとすも東のそらもそ中ぬかん
 からの人ほふもせ冷ひく後ハ秋くま
 けつわわらんうれ秋の流るふ海へそ
 まる今一わつふくろくもるあふふ
 のあふふ又秋之集云紀伊ふふあふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふ

[illegible]

今
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

集子八不五

五
姨奇山

わんざくあひのいしとるもいそとよなる月とて
 ちんねねん云とるいそとよなる月とて
 みづもいそとよなるいそとよなる月とて
 とよわくともわひひとるあつたふ
 ちんねねん云とるいそとよなる月とて
 ておとよとよなるいそとよなる月とて
 ちんねねん云とるいそとよなる月とて
 ちんねねん云とるいそとよなる月とて

えんふもとふも鬼乃
あつたは素苑乃
ふもねふもあふも
わん人ふもえく
みふふふふふふ

五五
是乃商事

乙の娘は川を今ふと渡りまうとわくをたれじやれ
 乙八重は妹は海奥におるおのすゝめふ山わと
 木茂くおまゝとまゝにふと渡りまうとわ
 たりたれとれはわとわとまゝにふと渡りま
 うれ山はふたつ笑れまゝとわとわとふたつ

五六
何處之事
ハニアリ

五十六
五十七
人知我今变化娘子事

ひねんはのふかきとてんのかさうかい

事とてぬきふなりたうりし記を縁を記す
 石對ふお流る山の桐乃に枝をくはくはる人
 ねむとてあふ女は北くとも急とのへんがふ
 と流るふふとてし則て各ふふふとて
 しそむいし妻と流るふふとて急とてあふ
 ひるふふとてしとてあふ元年九月十五日は

万有經年也

改授合之為廣江自第中云之事亦未可知也
二本同一也之沙事亦未可知也

慶安四

辛卯

曆仲秋吉辰

寺町通圓福寺町

秋田屋平左衛門刊行



